

2022 Autumn

NO.480

AAR News



ウクライナ国内支援活動(写真左上から時計回りに)AARが提供したパソコンを使う小学生たち／修道院に避難する母親と子どもたち／子どもたちにTシャツを手渡すAAR理事長の堀江良彰／障がい当事者団体「リーダー」の皆さん

特集

ウクライナ国内に支援を届ける

AAR ニュース 2022 秋号

p2-5 特集：ウクライナ国内支援

p6-7 活動レポート：パキスタン洪水被災者支援、アフガニスタン地震被災者支援、令和4年8月大雨被災者支援

p8-9 特別インタビュー：中井 貴恵さん

(俳優／エッセイスト／大人と子供のための読みきかせの会代表)

p10-12 インフォメーション



AAR Japan

認定NPO法人 難民を助ける会



特集：ウクライナ国内に 支援を届ける

ロシアのウクライナ軍事侵攻が始まって半年余り、戦闘が収まる兆しはなく、未曾有の人道危機が長期化しています。AARは今年3月から隣国ポーランド、モルドバ経由で避難民支援を実施してきましたが、7月以降、ウクライナ国内で暮らす人々に直接支援を届ける活動を開始しました。この間の取り組みを報告します。



「障がい者も家族も疲れ切っています」 避難先の施設整備や現金支給を実施

ウクライナ国内の混乱が続く中、避難が難しい障がい者は特に強いストレスを抱えています。「最も脆弱な立場に置かれた人々」への支援を重視するAARは、現地団体を通じて障がい者支援を展開しています。

ウクライナでは3万人以上の知的障がい者が施設で生活していましたが、多くの施設が活動停止を余儀なくされました。空襲警報や砲撃の音、慣れない環境での避難生活は、知的障がい者を混乱させ、家族も含めて疲

労が増えています。

首都キーウ（キエフ）近郊で活動する知的障がい者の家族の会「ジェレラ」の要請で、AARは障がい者と介護者が一時的に離れて互いのストレスを軽減する「レスパイト・ケア」を実施しています。知的障がい者は順番にキーウ南郊の施設を訪問し、静かで安全な環境で散歩などを楽しむことで、久しぶりに笑顔を取り戻しています。

ジェレラ代表のライサ・クラフチェンコさんは「長引く戦争のストレスで、障がい者も家族も疲れ切っています。レスパイト・ケアはとても助かっています」と話します。

キーウ南西のビンニツァ市にある知的障がい者の親の会「オープン・ハーツ」の施設は、東部から避難して来た知的障がい者や高齢者を受け入れています。避難者の増加が見込ま

財政支援が40%削減され・・・

れることから、AARは6つの居室の新設を進めています。職員のスヴェトラナさんは「軍事侵攻の影響で行政の財政支援は40%も削減され、活動再開のめども立ちません」と不安そうです。

重度障がい児施設に42人避難
ルーマニア国境近くのホテルニウツィ市では、身体障がい者の当事者団体「リーダー」を通

じて、5つの病院と福祉施設を支援します。重度心身障がい児のための「マガリアン重症心身障がい児施設」は従来の入所者10人に加え、東部ドネツク州からの避難者42人を受け入れて混乱しています。

AARは同施設のケアワーカー5人分の給与を提供したほか、障がい者の避難生活を支える現金支給（1人約9300円）を行っています。



リーダーの代表、ヴァレンティナ・ドブリディナさん（左）と
ストロシネツ緊急総合病院のアレクサンダー院長（中央）

「日本からの支援で食料を買うことができます」

ナタリアさん（当事者団体「リーダー」の利用者）

東部ドネツク州にあるバフムトという小さな町で暮らしていました。今年2月以来、ロシア軍はあらゆる武器で私の町を砲撃し、市民が殺され、家や学校、病院が破壊され、薬も食料も衛生用品も何もかもなくなってしまうました。私は4月初旬、家族（夫、双方の親、姉と未成年のおい）を説得して故郷を離れました。1カ月後には戻るつもりでしたが、私たちと飼い猫2匹は帰れるあてもなく、現在は首都キーウに滞在して、もう半年近くになります。日本の皆さんからの支援によって、私たちは食料を購入することができます。本当にありがとうございます。





モンベルのTシャツを着て勢ぞろいした子どもたちとAAR理事長の堀江良彰＝ウクライナ・テルノピリ州ヤズローヴィツ修道院で7月29日

「日本から来てくれてありがとう」 ウクライナ西部の修道院を訪問

「日本から私たちに会いに来てくれて本当にありがとう」――。

ポーランド南東部から車で国境を越え、ウクライナ西部の中心都市リヴィウ経由で到着したテルノピリ州ヤズローヴィツ村。村はずれの美しい林の中にある修道院には2月末以降、同国東部や南部から避難して来た女性や子どもを中心に一時は100人以上が身を寄せ、訪問した7月末時点では約60人が滞在していました。中には身寄りのないお年寄りや障がいのある子どももいます。

ポーランド人の修道院長、シスター・ユリアは「ここに長く留まる母子もいれば、しばらく滞在してポーランドなどに移っていく人たちもいます。国内の物流が滞る中、この修道院は近隣の避難者や地域住民、地元の病院にも支援物資を分配する重要な拠点になっています」と説明します。

AARは3月以降、ポーランドの首都ワルシャワ郊外に本部を置くカトリックの修道会と連携し

て、食料や医薬品、衛生用品、衣類、家電製品などを調達し、この修道院に陸路輸送する支援を実施してきました。AARの支援によって、万一に備えた地下シエルターや医務室、子どもたちの遊び場も整備されています。ウクライナ北東部の都市ハルキウ（ハリコフ）から逃れて来た4人の子どもの母親（28歳）は、



修道院のキッチンでウクライナ料理「ヴァレニキ」（水餃子）を作る避難民の女性たち

*外務省の海外安全情報ではウクライナは「レベル4：退避勧告」ですが、AARは独自の情報収集に基づいて、同国西部地域については安全を確保して短期間入域することは可能と判断しました。また、AARは今回、カトリックの修道院に滞在する国内避難民に支援を届けていますが、布教などの宗教活動には一切関与していません。



英国の NGO と連携して地雷撤去

ウクライナ国内には現在、戦闘により埋設された大量の地雷や各種の不発弾があり、一般住民が危険にさらされるとともに、難民・国内避難民の帰還を妨げています。AARは地雷対策を専門とする英国のNGOヘイロー・トラストと連携し、資金提供を通じて地雷撤去を開始しました。AARは、1996年以降、アフガニスタンなどで資金提供や知見の共有を通じてヘイローと協力関係を築いています。

また、AARは11月26日(土)午後、ウクライナなどの地雷問題を考えるオンライン形式のシンポジウムを開催します。詳しいことは当会ホームページなどでお知らせいたします。

「民警として町を守っていた夫はロシア軍に殺されました。修道院に本当に温かく迎えてもらって、子どもたちは安心して過ごしています」。ここが単なる避難所に留まらず、戦禍で心に傷を負った人々の精神的な拠りどころになっていることが分かります。

今回の訪問では、株式会社モンベル(大阪市)から贈られたTシャツを持参し、AAR理事長の堀

江良彰が子どもたちに手渡ししました。さまざまな柄のTシャツは子どもや母親たちに大好評で、デイマ君(8歳)は「戦争をしている国に来てくれるなんて、すごいと思う。とても素敵なTシャツをもらって嬉しい」。ナターシャさん(8歳)も「Tシャツをありがとう。他の所にいる友だちに自慢したいです」と笑顔を見せてくれました。

「日本に来てほっとしています」ウクライナ避難民の女性

来日難民・避難民を支える緊急一時金の給付を行っています

AARは姉妹団体である社会福祉法人さぽうと21とともに、母国の紛争・政情不安からの退避を目的として来日した難民・避難民の方々の生活を支える緊急一時金の給付を行っています。9月13日時点で151人に当座の生活費をお渡ししました。

ウクライナの首都キーウから弟と2人で来日したヴィクトリアさん(21歳)は、「大学院で日本語を学んでいましたが、ロシアの軍事侵攻が始まり、母から海外に逃げるように言われました。父はウクライナ軍に加わって戦っています。私は日本語を生かして避難民の子どもたちをサポートする仕事をしながら、埼玉大学に通い始めました。日本に来てほっとしていますが、生活費や医療費が大変です。一時金の支給だけでなく、日本の皆さんに精神的にも支えられています。ありがとうございます」と話します。



ウクライナから来日したヴィクトリアさん



クラウドファンディングの「READYFOR」で、日本への退避者を支えていただくマンスリーサポーターを募集しています。

お申し込みはこちら

ウクライナからの難民をはじめ、母国の紛争や情勢不安からの退避を目的として来日した難民・避難民の方々が、日本での生活をスタートさせることができるよう支援しています。一人でも多くの方に支援を届けるため、READYFORでの継続寄付の募集を開始しました。難民の方々の声や支援の状況を毎月お届けします。ご協力をお願い申し上げます。





AAR が手配した給水車から水をくむ被災した人々

災害支援

パキスタン洪水被災者支援 給水車を手配 障がい者に食料配付

パキスタンでは6月中旬からモンスーンによる大雨が続き、8月末には国土の3分の1が水没して約1300人が死亡（9月5日現在）する大洪水が発生しました。AARは被害の大きいパキスタン北西部ハイバルパフトゥンハー州で、食料配付や給水を行いました。

貧困世帯の苦境に追い打ち

この地区は日雇い労働者などが多く、貧しくて食料が買えない住民もいます。障がい者は約300人おり、AARは8月31日から9月5日まで、障がい者のいる1家族あたり小麦・コメ・食用油など食料計30キロ、ミネラルウォーター、石けんなどを配付しました。ある身体障がい者の男性は「水も食料も何もなく本当に困っていた。日本からの支援に感謝します」と話し

ました。

不衛生な環境 感染症の懸念

これまで住民は、ポンプ式の浅い井戸で地下水をくみ上げていました。洪水で一帯が汚染されたため、AARは急きよ給水車（容量5000リットル）を手配し、9月4日から給水を始めました。

AARが支援するハイバルパフトゥンハー州ノウシェラ郡の被災地では、カブール川の洪水で3メートルの高さまで濁流が押し寄せ、約2万8000人が住む地区全体がほぼ水没。ある住民は「水が引いて家に戻ると、一階の家具

また、パキスタンでは料理を手で食べる文化があります。この地域では食事の前に手を洗う習慣が浸透していません。コレラやチフス、破傷風などの感染症予防のため、AARは石けんを配り、手洗いなどを呼び掛けています。



一帯が床上浸水したノウシェラ郡ビル・サバック地区



障がいのある男性に支援物資を届けるAAR イスラマバード事務所の小柳勇人

災害支援

アフガニスタン南東部地震

300世帯に食料を届けました

アフガニスタン南東部で6月22日、マグニチュード5.9の地震が発生し、1000人以上が死亡しました。AARカブール事務所の現地職員が7月23日、特に被害が大きかったバクティカ州ギヤン郡に入り、300世帯に食料などを手渡しました。

支援物資をロバに積んで

配付したのは1世帯あたりコメ24キロ、小麦粉50キロ、食用油10リットルのほか、豆類、塩、砂糖など約1カ月分の食料、石けん6



食料を受け取るために集まった人々



受け取った食料をロバに積んで持ち帰る人

個など。被災した住民たちは受けた支援物資をロバやオートバイに乗せて、少しでもホットとした表情で持ち帰っていました。

この地域はもういレンガ造りの建物が多く、4543棟が全半壊し、多くの人がテントで生活しています。そのひとり、障がいのあるサキ・ディーンさんは「日本からの支援に感謝します。これで当面は頑張れますが、厳しい冬が来る前にさらに備えが必要です。どうか引き続きの支援をお願いします」と訴えます。多数の地雷が残るアフガニスタンで、AARは子どもたちを地雷被害から守るための「地雷回避教育」を実施しており、被災地の子どもたちに啓発ノートも配りました。

災害支援

大雨被害の新潟にチーム派遣

福祉施設支援や炊き出し実施

8月初旬の記録的大雨によって、北陸から東北地方にかけて河川の氾濫、浸水など大きな被害が発生しました。AARは8月5日に緊急支援チームを新潟県村上市に派遣し、被災した福祉施設の再開支援や炊き出しを実施しました。

断水が続いていた同市内の障がい福祉施設2カ所に給水タンク（200リットル）、汚泥の除去や清掃に使う高圧洗浄機2台を提供。

自宅から施設までペットボトルで水を運んでいた職員は「タンクがあれば、自衛隊の給水車からもらった水を確保しておけます」と喜んでくれました。また、土砂崩れの被害を受けた同市小岩内地区の自治会、災害ボランティアセンターに、浸

水した家屋を乾かすための大型扇風機5台を届けました。

7日にはNPO法人ピースプロジェクト（代表Ⅱ加藤勉AAR理事）と協働で炊き出しを開始。う

だるような暑さの中、栄養バランスの取れた食事をとってもらおうと、冷たい麺類や水餃子、うな丼など味やバラエティにも考慮した

食事を10日間で計2035食を提供しました。被災者の皆さんからは「片付けに追われて調理の余裕がないので助かった」「おいしく

て思わずお代わりした」などの声が寄せられました。

現在、浸水被害を受けた障がい児世帯・困窮世帯などへの支援に向けた調査を進めています。



炊き出しの準備をする加藤勉AAR理事（左端）と生田目充（中央）



村上市の小岩内自治会に大型扇風機を届けるAARの大原真一郎（右）

絵本の読み聞かせで 伝えたいこと

俳優／エッセイスト

大人と子供のための読みきかせの会 代表

中井 貴恵さん

俳優として映画やドラマに数多く出演し、文筆業や絵本の読み聞かせ活動でも精力的に活躍する中井貴恵さん。長年にわたってAARの活動を応援くださり、ウクライナ緊急支援にもご協力いただいています。2020年から続く新型コロナウイルス感染に加え、世界中で人道危機が相次ぐ今、日々どのようなことを感じているか、読み聞かせを通じて伝えたいメッセージは何かを語っていただきます。

(聞き手・AAR東京事務局 中坪央暁)

子どもは戦争のことを分かっている

「コロナ禍が続く中、ウクライナ人道危機をはじめ、ミャンマーなどで深刻な事態が起きています。この間どんな思いで過ごしておられますか。」

「私たちの業界はコロナで大変なダメージを受けています。人前で話してナンボの世界ですから、不要不急という言葉に翻弄されてきました。その半面、芝居や映画などを通じて、人々の暮らしに潤いをもたらす仕事をしていることを改めて実感しました。」

「私たちの読み聞かせ活動は学校訪問ができなくなり、動画のネット配信を導入しました。子どもたちがたくさん観てくれましたが、やればやるほど、子どもたちと直に接したいという思いが募りました。」

「ウクライナの戦争のことは、日本の子どもたちもニュースを見て、何

か感じ取っていると思います。」

東日本大震災(2011年)の後、東北の被災地でも読み聞かせをしました。子どもたちは「地震や津波は人間の力では防げない」けれど、「戦争を止めて平和を守ることにはできる」とはつきり認識していました。私も戦争を経験した世代ではありませんが、読み聞かせを通じて何を伝えられるのだろうかと自問自答する中で、平和の大切さを伝えたり、気付いてもらったりすることはできるんじゃないか、逆に言う、私たちにできるのはそこまてかなという気がしています。

日々の暮らしをエッセイにつづる

「1977年に俳優デビューした後、1987年に結婚して俳優を休業され、赴任先の米国や札幌で暮らす中で『ニューヨークランド物語』『赤毛

のアンを探して』など素敵なエッセイ集を執筆されました。もともと文章を書くのはお好きだったのですか。」

「文章というか、文字を書くのが好きなんです。今はパソコンですけど、頭の中で考えたことを原稿用紙に書ききでどんどん書いていくのが苦にならなくて。直接のきつかけは、夫の研究に同行して米国の田舎町に住んだ時、東京の月刊誌編集部から「日本に手紙を送るつもりで米国の生活を書いてみませんか」と連載を依頼されたことです。」

翻訳の仕事もあります。ロシア民話『おおきなかぶ』は、日本でも定番の絵本がありますが、アイルランドの絵本作家ニアム・ジャークの英訳を基に翻訳するプロジェクトがあって、私が日本語版を担当しました。」

一冊の絵本との衝撃的な出会い

「1998年に「大人と子供のための読みきかせの会」を結成し、ボランティアで朗読会、朗読と音楽を組み合わせた「音語り」などに取り組んでおられます。読み聞かせを始めたきっかけは。」

「米国から帰国後、長女を出産しましたが、子育てって本当に大変なんです。疲れ切っているところに、娘が毎晩、「これ読んで」と絵本を持つ

て来るんですね。同じ絵本を繰り返し聞いて何が面白いんだろうと思いつつ、早く寝かしつけるために読んで聞かせていました。

ところが、娘の5歳の誕生日、私が通っていた幼稚園の先生から、プレゼントとして絵本『つりばしゆらゆら』（もりやまみやこ作）が贈られてきたんです。

娘は大喜びしましたが、読んでみて衝撃を受けたのは私の方で……：自分が子どもだった頃のこと、母が一生懸命してくれたことを思い出して、心の中をえぐられるような気がしました。

この時初めて、絵本は子どもだけのものじゃないんだ、子育てに迫られるお母さんたち、大人たちに向けた素晴らしいメッセージがあるんだと気付かされました。私は俳優として演じていたのだし、物語を読むのは好きだったので、大人と子どもに自分の声で絵本を読んで聞いてもらおうのはどうだろうと思いついたのです。



「大人と子供のための読みきかせの会」の20周年記念公演＝東京都内で2019年7月（中井さん提供）

その後、幼なじみの女性から「幼稚園の母親向けに子育て体験を話してほしい」と頼まれたんですよ。私はこの手の講演が苦手なので、「講演の代わりにこんなことできない？」と温めていたアイデアを提案したところ、その友人が「じゃあ、私がピアノ弾こうか」と言ってくれて、すぐに物語に合わせた曲まで作ってくれました。

幼稚園で開いたピアノ演奏付きの『つりばしゆらゆら』の読み聞かせ初公演は、子どもたちだけでなく、お母さんたちからも「感動して涙が出た」という声が聞かれるなど大好評でした。大きな手応えを感じ、これが会の活動の原点になっています。

寄付を通じて社会とつながる

――2007年にAARの地雷廃絶イベントで絵本の朗読をしていただいた以来のご縁です。当会のどういう点に共感していただいているのでしょうか。

平和を目指す活動の趣旨に賛同して、柳瀬房子AAR現名誉会長が書かれた絵本『地雷ではなく花をください』を朗読しました。

大人向けの公演は別ですが、私たちはボランティアとして行っていて、その代わり募金箱を置いて、任意でお気持ちを頂戴しています。たとえば100円でも重みを感じるんですよ。



地雷廃絶を呼び掛けるAARのイベントでステージに立つ中井さん＝六本木ヒルズ（東京都港区）で2007年9月

多めに募金をいただいた時は、それを社会貢献に取り組む団体に寄付して役立ててもらえば、私たちの活動がもっと社会とつながり、そこに新たな意味を見出せるんじゃないかとメンバーと話し合って、私たちの志を掲げました。

寄付先を検討した時、寄付がどう使われたか、どう役立ったかを丁寧に報告してくれて、より身近に感じられる団体を選びたいと考えました。私たちが公演でいただいた、皆さんの思いが込められた募金を託すのですから、私たちにも大きな責任があります。

海外の難民や障がい者支援などに取り組むAARには、信頼してご寄付をお贈りしています。職員の方が実際に現地に行つて支援活動をされていることに共感しますし、今後もしも応援していきたいと思えます。

明るい未来を次世代に伝えたい

――俳優や文筆業、読み聞かせは、いずれもご自身の思いを表現する手法のようにお見受けします。「表現者」として世の中の大人たち、子どもたちに伝えたいメッセージは何でしょうか。

子育てに奮闘するお母さんやお父さんたちが息抜きできたり、物語を通じて何か気付いたりできるようなメッセージを送りたいと考えています。

私自身、一冊の絵本との出会いから生まれた感動と驚きから、その後の活動が始まりました。「何か始めたいけど、どうすればいいかわからない」という女性たちの声を聞きますが、私は絵本の感動を多くの子どもや大人に届けたいと思ってやってきました。迷っている方には「何かをしなければ何も始まらない」とお伝えしたいですね。

そして、子どもたちには明るい未来を信じて生きてほしいと願っています。最近「大丈夫だよ」とばかりも言っていられないことが多くて、正直言っちゃって心配ですが、あなたたちが暮らす日本も世界も本当は素晴らしいんだよ、必ず希望を実現できる未来があるんだよと言ってあげたい。大人にも子どもにも、そんな前向きなメッセージを伝えていければと思っています。

2022年 夏募金

ご協力ありがとうございました

6月にお送りした夏募金のお願いに、のべ1,824名の皆さまより2,691万1,350円のご寄付をいただきました。温かいご支援に心より御礼申し上げます。難民となった方々が直面する困難を少しでも軽減できるよう、活動を続けてまいります。



モルドバに避難したウクライナ難民と地元の子どもたちが交流する場をサポートしています

ウクライナ緊急支援へのご協力

ロシアによるウクライナ軍事侵攻を受けて、避難を余儀なくされている方々への支援にたくさんの個人・企業・団体の皆さまよりご寄付をお寄せいただいております。ご協力に感謝申し上げます。個人情報に配慮し、100万円以上をお寄せいただいた企業・団体のみをご紹介します。

宗教法人智恩寺
株式会社モンベル
株式会社リバーレテ

(2022年9月12日時点、50音順)

モンベルクラブ・サポートカードでのご支援

アウトドア用品の総合メーカー、株式会社モンベル（大阪市）のご協力により、モンベルクラブ・サポートカードの対象団体にAARが選ばれました。モンベルクラブに入会して同カードを作成すると、モンベルで商品をご購入いただくたびに会員特典のポイントに加え、お買い上げ金額（税抜）の3%分のポイントがAARに寄付されます。モンベルクラブの専用サイト、お電話、メールのほか、店頭でも申し込みいただけます。



遺贈寄付・相続財産をお寄せいただきました

野村 竜一さま（神奈川県）
弘中 余糸子さま（岡山県）
Y・Iさま（兵庫県）

(2022年3月11日～9月7日、50音順)

皆さまの思いを大切に受け止めて、難民や子どもたち、障がいのある方々のために役立ててまいります。

フジロックに参加

音楽を通じたウクライナ支援

野外音楽フェス「フジロックフェスティバル'22」が7月29日～31日、新潟県湯沢町苗場スキー場で開催されました。会場ではウクライナ人道支援のための募金活動が行われ、寄付先のひとつとしてAARが選ばれ、活動紹介のブースを3日間出展しました。ブースでは当会が取り組むウクライナ支援活動を伝えるとともに、オリジナルチャリティ商品を販売し、訪問者にはタトゥーシールをプレゼントしました。多くの方がブースに立ち寄り、「まず現状を知ることが支援につながると分かった」などの声が寄せられました。来場者からの募金にフジロック事務局が同額のご寄付を上乗せし、チャリティグッズの売り上げの一部と合わせてAARにお寄せいただきました。



AARのブースを訪れた親子

子どもたちの絵でアフリカと日本をつなぐ

一般財団法人 mudef のアンバサダーを務める歌手のMISIAさんが、2019年にザンビアのメヘバ難民居住地を訪れたのをきっかけに、同財団が「絵を描く楽しさを子どもたちにプレゼントし、その絵を日本の皆さんに届けよう」と、「MISIA HEART FOR AFRICA」プロジェクトを立ち上げました。AARが支援するメヘバ難民居住地・再定住地の子どもたちがこのプロジェクトに参加し、「わたしの大切なモノ」をテーマに描いた絵が8月8日～9月30日、丸の内ハウスライブラリー（東京都千代田区）に展示されたほか、同財団のホームページに掲載されました。



作品249点が展示された会場

味もパッケージもリニューアル！ チャリティチョコレート予約受付中

4つの味が楽しめて、毎年大好評のチャリティチョコレートをリニューアルしました。「ミルク」味をご希望の多かった「ビタスイート」に変更し、パッケージはトルコで暮らすシリア難民の子どもたちと、ウガンダの難民居住地の学生が描いた花の絵をおしゃれにデザイン。プチギフトや内祝いにもぜひご活用ください。

発送は11月より開始しますが、同封のチラシや販売サイト「AAR チャリティショップ」で10月1日より予約を受け付けています。皆さまのご注文をお待ちしております。



ビタスイートに、ホワイト、抹茶ホワイト、モカホワイトの4枚入り
700円(税込)。詳細は同封のチラシをご覧ください。

＼お申し込みはこちら／



ふるさと納税を通じて国際協力

佐賀県のふるさと納税を通じて、AAR をご支援いただけます。納税額の90%が佐賀県から AAR に交付され、県内で行う緊急支援や国際理解教育活動、海外の難民支援などに活用させていただきます。寄付をしてくださった方には、佐賀県産の地酒やお米、スイーツセットなどからお選びいただいたお礼の品をお届けします。ふるさと納税を通じた支援もぜひご検討ください。



有精卵とノンホモ・低温殺菌のミルクを使用した
ケーキとプリンセット

＼新しいお礼の品も入荷！／

お申し込みはふるさと納税サイト
「ふるさとチョイス」から



「お世話になった方々に感謝する会」を開催しました

新型コロナウイルス感染が拡大した2020年以降、AARの活動に深く関わった4名の方が亡くなりました。ボランティアとして長年活躍された長田富子さん（元理事）と伊崎逸子さん、職員として事業に携わった渡邊和恵さん、浅野武治さんです。コロナ禍のため葬儀への参列がほとんどできなかったため、改めて故人の生前の活動に感謝し、関係者と思い出を分かち合う場として「お世話になった方々に感謝する会」を8月28日、ホテルメトロポリタンエドモント（東京都千代田区）で開催しました。当日はご家族やご友人、関係者の皆さま、AARのボランティアや役職員、元職員など約90名が参列しました。

いつも丁寧に作業をこなしてくださった長田さん、声をかけるとすぐに駆けつけて作業を手伝ってくださった伊崎さん、国際協力への強い思いを持ってAARに転職された渡邊さん、得意の料理と音楽、温かい人柄で人と人をつなぐ活動をされた浅野さん。AARの理事や職員、元ボランティアらが故人のお人柄や思い出話を紹介しながら感謝の気持ちを述べたほか、故人のご家族からもお言葉を頂戴しました。

会場には故人の写真と、親交のあった方々からお寄せいただいたメッセージを展示。多くの方々が足を止め、思い出を語り合いながら故人を懐かしむひと時となりました。ご参列くださった皆さま、弔意をお寄せくださった皆さまに心より御礼申し上げます。



左から長田富子さん、伊崎逸子さん、
渡邊和恵さん、浅野武治さん



献花台に花を手向ける参列者



写真やメッセージを展示し、
故人を偲びました

共感広げた「ロヒンギャ難民を忘れない」トークイベント



ロヒンギャ難民キャンプの子どもたち：撮影 Arman Noor Rashid

2017年8月のロヒンギャ人道危機発生から5年の節目を迎えた8月20日、AARはオンライン形式のトークセッション「ロヒンギャ難民を忘れない～人道危機発生5年&混迷するミャンマーの行方」を開催しました。YouTubeライブ配信を含めて300名近くの皆さまにご参加いただき、ロヒンギャ難民問題の現状と課題をともに考えました。

ジャーナリストの堀潤さんを司会にお招きし、AAR会長の長有紀枝が「ウクライナ危機に関心が集まる今こそ、ロヒンギャ問題に改めて目を向けたい」とあいさつ。AAR東京事務局の中坪央暁が6月末にバングラデシュ・コックスバザール県の難民キャンプで撮影した動画をお見せしながら、5年を経て厳しさを増す難民の状況を報告。ビルマ・ミャンマー研究の第一人者である根本敬・上智大学教授が昨年2月の軍事クーデター後のミャンマー情勢を解説したのに続き、在日ロヒンギャ女性の長谷川留理華さんが日本から見た母国の現状への率直な思いを語りました。

「ミャンマー民主化への希望を持ち続ける必要がある」



左上から時計回りに：根本敬さん（上智大学総合グローバル学部教授）、堀潤さん（ジャーナリスト）、長谷川留理華さん（在日ロヒンギャ女性）、中坪央暁（AAR 東京事務局）、長有紀枝（AAR 会長）

（根本教授）、「自分にできることから周囲に発信していきたい」（長谷川さん）、「私たちはロヒンギャ難民の存在を決して忘れてはならない」（堀さん）などの呼び掛けに対し、多くの参加者から「ロヒンギャ問題の深刻さを改めて認識した」「深みのある素晴らしいイベントだった」「私たちに何ができるか考えたい」といった感想が寄せられました。

トークセッションの録画、現地で撮影した動画は以下よりご覧いただけます。

トークセッション動画



現地撮影動画



ロヒンギャ難民の「これから」を、継続的にご支援ください

AARのロヒンギャ難民への支援活動は、皆さまからのご寄付によって実施されています。避難生活の長期化に伴い、さまざまな課題が生じる中、とりわけ子どもたちの未来を支えるために、さらなるご支援を必要としています。毎月定額をご寄付いただく「マンスリーサポーター」として、継続的なご協力をご検討いただけますと幸いです。お申し込みはホームページから、またはお申し込み用紙をご請求ください。

HPからのお申し込みはこちらから



クレジットカード、銀行口座からのお引き落としをお選びいただけます。

編集部より

このたびのパキスタン洪水の被災者支援に、ご寄付とともに「心ばかりですがパキスタンの人たちの力になれば」「一日も早い復旧を願っています」といった温かいメッセージを連日いただいております。託していただいたお気持ちを着実に被災者の方々に届けてまいります。

AAR News

2022 Autumn NO.480

次号は2023年1月上旬にお届け予定です。

特定非営利活動法人 難民を助ける会

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズビル7F

Tel.03-5423-4511 Fax.03-5423-4450

www.aarjapan.gr.jp



AAR Japan